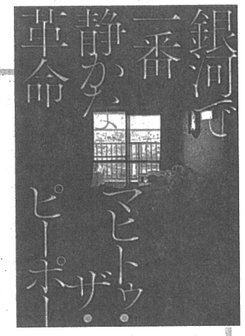
くらし

カリスマ書店員の激オシ本

橙書店(熊本市)　田尻久子さん

マヒトゥ・ザ・ピーポー著
『銀河で一番静かな革命』



心臓にそっと触れてくる言葉

普段は音の世界で表現するマヒトゥ・ザ・ピーポーの初の小説。彼の曲の中に「なんでもないただのドレミの羅列で悲しみではなく人は涙を流したりします」という歌詞があるが、それを言葉でやろうとしているのではないかと思った。

この小説のカバーを外すと文字が現れる。私はそれを、本文を読み終えてから読んだ。もし先に読んでしまっていたら、物語の印象はかなり変わっていただろう。あえて内容を少し言うとしたらSFということになるだろうが、ある設定以外は突飛なことは何ひとつおきず、日常の中で物語は進んでいく。ささやかで壊れやすい生活と、優しいからこそあやうい人たちが淡々と描かれていく。

ふと聞こえた音のつらなりが心の奥底に触れて、ふいに泣きたいような、なにかをたたえたいような気持ちになることがある。物語の中の人々―海外に行ったことがない英会話講師、長い間曲を作っていないミュージシャン、シングルマザーとその娘、ホームレスのじいさん―彼らが何げなく発する言葉が、音楽と同じように心臓にそっと触れてくるような気がした。たとえば、ホームレスのじいさんがつらつらと言葉をこぼして語る田舎の光景は、雨上がりの葉からこぼれ落ちる水滴のようで、私はたとえこの光景を見たことがなくとも、その手触りを知っていると感じた。

著者の音楽に通奏低音のように流れる音を言葉に置き換えたら、この物語になるのではないだろうか。

(幻冬舎・1620円)

単行本

▼大矢靭音監修『田中一村 〝南の琳派〟への軌跡』　50歳から鹿児島県の奄美大島に移り住んで南国の風物を鮮烈に描き、独自の日本画の世界を築いた田中一村(1908～77)。幼少期の菊の絵から、未完のまま残された大作までをカラー図版で紹介する。「別冊大陽 日本のこころ」シリーズの1冊。(平凡社・2700円)

▼土屋健著『恐竜・古生物ビフォーアフター』　新たな化石が見つかるたびに学説が更新される古生物学。例えばイグアノドンは、尾を地面につけて二足歩行したとされてきた。だが、コンピューター技術や遺伝子解析から、二足と四足を使い分けていたという説に変わっている。サイエンスライターが最新研究の成果を紹介する。(イースト・プレス・1728円)

▼細野祐二著『会計と犯罪』　企業から多額の報酬を得る日本の公認会計士監査は機能しているのか。制度疲労が著しい現行司法は経済事件に対して有効か―。粉飾決算事件に関わったとして有罪が確定し、公認会計士の資格を奪われた著者が郵便不正事件から日産ゴーン事件まで発する。(岩波書店・1944円)

文庫・新書

▼西野智彦著『平成金融史』　昭和の終わりに始まったバブル経済は、平成に入ってはじける。その後も、不良債券問題、山一証券の破綻、リーマンショックと経済の混乱は続く。その中で金融当局は何を考え、どう動いたのか。長崎県出身の金融ジャーナリストが関係者に取材し、「金融失政の30年」を検証する。(中公新書・994円)

▼野地秩嘉著『サービスの達人たち　おもてなしの神』　人気シリーズの文庫オリジナル版。客に感動を与える真のサービスとは何か。予約が取れない銀座のすし屋の「女子親方」。客が殺到する高知・土佐の鮮魚店。伝説のイタリアンレストラン「キャンティ」を支えたウエーターなど接客のプロ10人を紹介する。(新潮文庫・562円)

▼らいかーると著『アナリシス・アイ』　サッカー戦術分析ブログを主宰し雑誌にも寄稿している著者が、アナリシス・アイ(分析眼)を駆使したサッカー観戦の面白さを提案する。選手の配置を知りキックオフでのボールの行方から試合を読む。時間とスペースを支配する意味などを分かりやすく解説。サッカーの見方が劇的に変わる。(小学館新書・864円)

こどもの本

▼長薗安浩著『ネッシー』　ビートたけし著『キャバレー』

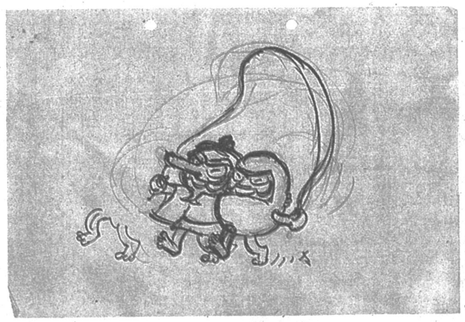
記者本

古賀英毅

漫談家と同姓同名だ。他にもその芸人と同じ名前が出てくるのためか、裏社会とショービズとの深い関係にも真実味を感じる。

はい上がろうともがく芸人の姿。それは若かりし頃の著者のものだろう。最後の2章は成功した後。しかし、そこにはもう虚無感だけが漂う。著者なく、心の中をちょっとのぞいたような気分になった。

(文芸春秋・1566円)



©Satoshi KAKO

かこさとしの世界

加古総合研究所監修

描くことが好きだった少年は、戦争を経験し、子どもたちのために創作することに生きる意味を見いだした。2018年に92歳で亡くなった絵本作家かこさとしの回顧展公式図録。人気シリーズ「だるまちゃん」の下絵=写真=など初公開の資料や作品を掲載し、600冊以上の作品を残した11歳からの足跡を紹介する。作家が子どもたちに伝えたかったという「生きる力」を未来にもつなげたい。

(平凡社・2160円)

本と人

綿矢(わたや)りささん

片思いから始まる同性の恋愛

生のみ生のままで

彼女の肌が、吐息が、唇が、舌が、強烈な引力をもって私を誘う―。帯の言葉が、引かれ合う女たちの気持ちの高ぶりを物語る。「ほかの世界を一切書かず、2人の関係だけを書いた。完全に好きな物語です」。作品へのいとおしさが表情ににじむ。

携帯電話ショップで働く逢衣(あい)と芸能人の彩夏(さいか)。彼氏と旅行中に出会った2人は東京に戻ってからも女友達として親しくするが、逢衣の結婚が現実的になると一転。彼女に一目ぼれしていた彩夏は理性を捨て、唇を奪う。

「男女の恋愛が同性同士になるとどう変わるのか」。そう考え筆を進めたが、女性を恋愛対象として意識したことがない逢衣は当然のように拒否反応を示す。「激しい愛情がないと相手の気持ちを変えることはできない」のは、片思いから始まる恋ならでは。彩夏は逢衣の存在こそが自分を輝かせると、ストレートに気持ちをぶつける。

物語には二つのステージがある。関係をスタートさせた20代と、彩夏の芸能活動を優先させるために離れ、再会した30代と。この間7年。あえて停滞期を設けたのは?「20代と30代では考え方が変わる。30歳前後という女性にとって大切な時期を過ごさせ、以前の恋とは違う形で出直すことを書いてみたかった」

19歳だった2004年に「蹴りたい背中」で芥川賞、12年「かわいそうだね?」で江健三郎賞を受賞した。「主人公の内面葛藤が大きなテーマで、相手に理解しらえない怒りや未熟な自分に対する反発書くことが多かった」と振り返るが、は「初めて相手を見据えて書いた。実る恋愛を書けて本当にうれしかったと破顔した。

太宰治のような文豪への憧れが作家発点で、一時期は「言葉を道具として使こなす」ことに注力した。そうして培った表現力が登場人物を取り巻く描写に説得を与えてきた。まだ30代。独自の世界観持つ綿矢りさの作品に今後も目が離せない。

(集英社・上下各1404円)